

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」035

近代建築史上の保険会社_06_ジョサイア・コンドル、わが国の近代建築の父

今年の「アジア・太平洋リスク・保険学会」(APRIA)の大会は、西南財経大学の主催で、中国四川省の成都(Chengdu)で開催された。会場は、成都の中心部にある高級ホテルであった。日本から成都への直行便があり、5時間程度でいける。また時差もないので観光地としても魅力的である。大会の内容については、APRIAのウェブサイトを参考にさせていただき、ここでは成都の印象をごく簡単に述べておきたい。成都の第一印象は、内陸部の地方都市にも表れている中国経済のエンジンの力強さであった。不便な地方都市と覚悟していたが、その先入観は良いほうに裏切られた。完備された自動車道路、中心部の近代建築、欧米の高級ブティック街など、まさに「普通の大都市」だった。

初日に少し時間があつたので、お金を使う練習をした。小手調べはスターバックスでのコーヒー。店員には英語が通じなかったが、19円でレギュラーコーヒーにありつけた。日本円に換算して400円弱なので、価格的には日本とあまり変わらない。当日の客層は、ちょっと気張っている若者といった感じ。その後、衣料や雑貨の庶民マーケットをブラブラしたが、スタバのコーヒー一杯の値段で買ってしまうような衣服や雑貨が豊富にそろっている。メルセデスに乗ってルイ・ビトンを買う少数のひとと、庶民マーケットでお金を節約するたくさんの人々が近い空間に併存している。その意味でも、成都はまさに大都市だ。

成都に二つ楽しみを期待していた。一つは本場の麻婆豆腐を食べること。そしてジャイアントパンダに会うこと。後者は、大会主催者のご厚意で最終日の午後にパンダを育成するセンターのツアーを組んでいただいた。パンダの赤ちゃん数匹がタオルの上でまさに「たればんだ」状態で、熟睡しているところが見られたのは貴重な経験だった。前者については、少々苦い思い出となった。麻婆豆腐が四川料理を代表する料理だと思っていたのが間違っていた。麻婆豆腐は、高級ホテルで出るような本格的な四川料理ではなかった。大会の会場となったもう一つのホテルの昼食時にバイキング方式で麻婆豆腐が提供されていたが、日本で人気のある例の麻婆豆腐店には及ばないものだった。そこで、ホテルで麻婆豆腐の美味しいレストランを紹介してもらったが、彼らがだいたい調べた拳句、メモしてくれたレストランの名前は、日本で展開されている麻婆豆腐専門店と同じ名前の店だった。残念ながら、時間がなかったので、その店の味を確かめることができなかった。

大会主催者の歓待は素晴らしいもので、ほとんどの参加者は満足していたようだ。大会で提供される食事は、すべて美味しかった。しかし、すべて四川料理であった。これが北京や台北などの成熟した大都市だと、郷土料理の一本槍ではなく、広東料理や北京料理を取り混ぜて、参加者の舌を飽きさせない。この点に限って言えば、成都がまだ地方都市であると実感した。蛇足だが、オーストラリアからパネリストで参加してくれた私の友人は、白ワインしか飲まない人である。ところが、ホテルの晩餐会のワインは赤ワインだけであり、白ワインはなかった。主催者が提供してくれた最終日の夕食会のレストランにも白ワインはなかった。このあたりに成都がまだインターナショナルな都市になりきれていない

ことを感じた。

日本の近代建築史においてジョサイア・コンドルの名前を忘れることはできない。彼は、日本の近代建築に、赤ワインも白ワインももたらした人だ。ゴシック・リバイバルで有名なバージェスの設計事務所で腕を磨き、1877年にお雇い外国人として来日した。コンドル24歳。工部大学校（東京大学の前身）で、辰野金吾、片山東熊などの第一世代の優秀な建築家を育て上げた。彼の初期の作品に鹿鳴館(M16)がある。

コンドルは、日本文化を愛し、官を辞した後も日本に留まった。岩崎家をはじめとする財閥は、建築家として独立したコンドルに数多くの設計を依頼した。とりわけ三菱との関係が深い。コンドルとその弟子の曾禰達蔵との議論をもとに、三菱の荘田平五郎が丸の内に「一丁倫敦」と呼ばれる近代的ビジネス街を形成したことは有名である。コンドルと曾禰は、赤煉瓦造りの三菱一号館(M27)、三菱二号館(M28)、三菱三号館(M29)を設計した。コンドルは岩崎家の邸宅等も数多く手掛けている。現存するものとしては、旧岩崎邸(M29)、開東閣(M41)、岩崎家玉川廟(M43)などがある。

三菱以外では、三井家の迎賓館として建設された綱町三井倶楽部(T2)が有名である。古河財閥の二代目の古川虎之助の自邸として設計された旧古川家(T6)は最晩年の作品。躯体は煉瓦造、外観は真鶴産の新小松石、屋根は天然ストレート葺きで地上2階、地下1階の堅固な建物である。関東大震災でもビクともせず、約2000人の避難者を収容したと伝えられている。

さて三菱も三井も古河も保険会社と関係する財閥であるが、コンドルと保険会社の関係はどうだったのか。管見のかぎり、コンドルは保険会社の設計を依頼されていない。しかし無関係というわけでもない。最初に紹介すべきは、鹿鳴館である。井上馨の辞任とともに鹿鳴館時代は終焉したが、その建物は1890年に宮内省に払い下げられ、一部が華族会館として使用された。1894年に東京を襲った地震で被災した後に華族会館に払い下げられたが、1898年にはコンドル自身が改修工事を施し、外観が大きく変更された。その後1927年に華族会館の敷地が日本徴兵保険株式会社に売却され、敷地内に同社の本社が新築されたが、旧鹿鳴館の建物は昭和15年に取り壊されるまで残されていた。掲載した絵葉書の画像で白い建物が新築された日本徴兵保険の本社であり、右の建物がコンドルの改修工事後の華族会館（鹿鳴館）である。ちなみに日本徴兵保険は戦後の大和生命の前身会社。コンドルが手掛けた鹿鳴館・華族会館は、NBF日比谷ビル（旧大和生命ビル）がある場所にあったが、今は「鹿鳴館跡」のプレートが設置されている以外は何も残っていない。

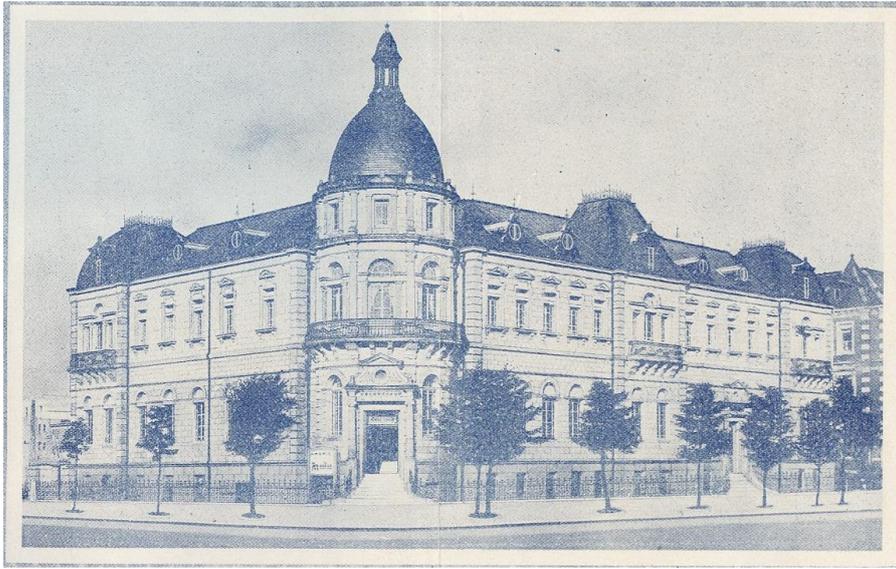
三菱2号館は、1892年に着工し、1895年7月18日に竣工したが、当初は、東京海上、明治火災、および明治生命の保険三社がここに本社を置いた。明治生命は、1915年に三菱から土地と建物を購入し、旧「明治生命館」とした。東京海上は1918年に丸の内に東京海上ビルディングを建設したので退去した（この時点で火災保険に参入していたので、正確には「東京海上火災」となっていた）。今回掲載した旧「明治生命館」の画像は、同社が大正15年に出版した『略史』の挿絵に挿入されているものである。

保険毎日新聞「みちくさ保険物語」035

以上のようにコンドルは、保険会社から直接設計を依頼されたことはなかったものの、建設後に保険会社に転用されたものが確認できる。コンドルと保険会社の関係が薄かった理由は、コンドルの建築家として名声から、公共建築物や財閥の邸宅の依頼が多く、またビジネスに関係するものは三菱とのつながりが強かったことが考えられる。さらにアメリカから導入された新しいオフィスビルの技法などに関心が薄かったことも想像できる。河鍋暁斎に師事して日本画を学び、花柳流の舞踏家である日本女性と結婚した英国人にとって、東京海上ビルディングのようなアメリカ的な合理的なオフィスビルは、興味の対象ではなかったのではなかろうか。画像を掲載した旧古河邸（現在の旧古河庭園大谷美術館）に表現された彼の最晩年の枯淡な境地を知れば知るほど、その確信は深まるばかりである。



日本徴兵保険株式会社全景、右側の建物が華族会館（昭和初期）



三菱二号館 『明治生命略史』大正13年より



旧古川邸（現旧古川庭園大谷美術館）筆者撮影